

## 学位論文題名

## 自伝的記憶の分布，想起内容とその特徴

## 学位論文内容の要旨

自己に関わる思い出，人生の記憶を自伝的記憶という。本研究は，自伝的記憶の内容と量を手がかり語法，分類課題により検討したものである。手がかり語法とは，単語を提示し，その単語から連想される自伝的記憶を想起させ，それが起きた時期やその記憶の特徴を尋ねるという方法である。また，ここでの分類課題とは，想起された記憶を内容によって分類する／させる方法である。研究1，2では，これらの方法を個別の参加者に対して用い，日本人高齢者においてレミニセンス・バンプ（高齢者が自伝的記憶を想起した場合，10-20代の記憶がより多く想起されるという現象）が生じることを確認し，その内容を，実験者が分類することにより分析した。また研究3では，結果の一般化をはかるため，大学生を対象に実験を行った。ここでは手がかり語法により想起された自伝的記憶を，参加者自身に様々な次元で分類させた。これらの結果から，レミニセンスを含む，人生を通じて想起される自伝的記憶のおよそ5割は自己を中心とするものであること，3割が自己と他者を中心とするものであること，手がかり語によって想起される自伝的記憶は個人的で感情価をおびたものであることなどを明らかにした。

本論文は5章から成る。以下，各章の概要を述べる。

第1章では，先行研究を概観し，レミニセンス・バンプの特徴や，その生起に関わる要因（参加者の年齢，手がかりの違い，参加者の性別，文化），およびレミニセンス・バンプの原因に関する諸説を整理した。レミニセンス・バンプの原因については(1)新奇説・示差性による説明，(2)生物学的説明，(3)ライフ・スクリプトによる説明，(4)アイデンティティの確立による説明などがあるが，これらは概念的に分離しにくい。これらを切り離して検討する必要性を指摘した。

第2章（研究1）では，レミニセンス・バンプの生起に関わる要因のうち，参加者の年齢の要因を取り上げ，各年齢群を比較し，レミニセンス・バンプが時間軸上のどこで生じるかを検討した。また，想起される出来事の心理的特徴についても検討した。すなわち，20代から60代の参加者を対象とし，手がかり語に関連する出来事を想起してもらい，出来事を経験した年齢または日付の回答を求めた。また，想起された出来事の心理的特徴（鮮明度，重要性等）についても回答を求めた。その結果，有意には至らなかったものの，60歳群においてバンプの兆候がみられた。20，30，40歳群ではレミニセンス・バンプの兆候はみられなかった。また，レミニセンス・バンプが生じるとされる記憶（10代，20代の記憶）とその他の時

期の記憶において、心理的特徴が異なるという結果は見られなかった。高齢者においてバンブが有意に至らなかった原因としては、参加者数の不足や、1人あたりの想起個数が少なかったことが可能性として挙げられる。そこで第3章（研究2）では高齢者に対象をしばり、手がかり語の数を増やすことで、1人あたりから得る想起数の増加を図った。

第3章（研究2）では、60歳以上の高齢者を対象に、ライフスパンにおける自伝的記憶の分布と想起内容を検討した。各対象者から最高100個の記憶を取得することを目的とし、手がかり語法による想起を求めたところ、得られた記憶に、10代をピークとするレミニセンス・バンブが確認された。加えて、想起内容を尋ね、行為の主体という観点から分類したところ、自己を中心とする「自己主体」、自己と他者が登場する「自己他者」、他者の活動に関する「他者主体」、自己や他者が明示的には含まれない「シーン」の4種類に分類することができた。各種類の記憶の割合は、バンブを含むどの時期においても、「自己主体」約5割「自己他者」約3割であり、これらが想起された記憶の大半を占めていた。つまり、10代の記憶は想起量は多いが（レミニセンス・バンブ）、質的には異なるものではないことが示された。レミニセンス・バンブは、自己のアイデンティティの確立による（アイデンティティ確立説）というよりも、10-20代は生物学的に認知的パフォーマンスが高まるために生じる（生物学的説明）と考える方が妥当であると考察した。

しかし、このような想起の特徴は、高齢者のみに見られることかもしれない。また、新奇性やライフ・スクリプトの影響に関する検討も必要である。さらに、上記の分類は実験者の視点によるものであり、参加者自身にしか分からない背景やそのときの心理状態を捉えるものではない。そこで、第4章（研究3）では、参加者自身に想起内容の分類を求める。

第4章（研究3）では、研究2の結果を拡張し、自伝的記憶の内容についてさらなる検討を行った。ここでの実験は二段階からなる。まず研究2と同様に、手がかり語法を使用して、参加者に出来事と日付を想起させ、内容の想起を求めた。次に、およそ1週間後、参加者自身による分類課題を行った。分類枠組みは、(1)発達段階（小学生、中学生等）、(2)公的イベント（卒業、入学等）、(3)私的イベント（成功、失敗等）、(4)参加者自身が作成した分類枠組みであった。また、研究2と同様、実験者による分類も行った。

その結果、量については研究1と同様バンブはみられず、バンブは高齢者においてのみ見られることが確認された。想起内容については、(1)発達段階による分類は的確に行われること、(2)公的イベントとして分類される記憶は全体の約2.5割であること（つまり大半は私的イベントであること）、(3)私的イベントや(4)参加者自身による分類結果からは、感情（楽しい、悲しい等）が出来事を分類する上での大きな手がかりとなっていることが示された。実験者による分類結果（自己主体、自己他者、他者主体、シーン）は、高齢者の想起内容と同様の傾向であった。

以上より、青年においても自己主体、自己他者、他者主体、シーンの割合は同様であるものの、主観的には、感情が想起された記憶の分類の大きな手がかりとなっていることが明らかになった。また、実験者による分類と参加者による分類との対応は必ずしも一致せず、感情を伴う出来事は「自己主体」「自己他者」等によらず分布していることが示された。

第5章では、一連の実験から得られた知見に基づき、ライフスパンにおける自伝的記憶の

分布と想起内容について，総括的な議論を行った。

# 学位論文審査の要旨

主 査 教 授 仲 真紀子  
副 査 教 授 和 田 博 美  
副 査 教 授 亀 田 達 也

学 位 論 文 題 名

## 自伝的記憶の分布，想起内容とその特徴

まず、当該研究領域における本論文の研究成果について、本審査委員会の評価を述べ、その上で審査結果を述べる。

### 1. 本論文の研究成果

本研究の成果として、以下の三点を挙げることができる。

第一に、本研究は、レミニセンス・バンクが日本の高齢者の記憶においても見られることを明らかにした。バンクは欧米では広く検討されているが、日本では高齢者を対象とした研究が困難であることもあり、これまで検討が行われてこなかった。

第二に、バンクという自伝的記憶の量的側面のみならず、内容についても検討し、バンクの記憶が他の記憶と質的に異なるものではないことを示した。

第三に、参加者自身による分類課題により、想起された自伝的記憶には感情が大きく関わっていることを明らかにした。

第四に、方法論上の工夫がある。本研究では、手がかり語法を発展させて記憶の内容を調べ、さらに実験者による分類と参加者自身による分類を併用することで、自伝的記憶の内容に関するより詳細な情報を得た。この方法は今後の研究にも寄与するものである。

### 2. 審査の要旨

自伝的記憶は、自己意識や自尊感情などとも関わる、記憶の重要な構成要素である。本研究は、手がかり語法と分類課題を用いて、自伝的記憶のレミニセンス・バンクおよび内容の検討を行った。日本人高齢者におけるレミニセンス・バンクの存在を示し、その内容に迫ったこと、そして青年が想起する自伝的記憶との共通性、異質性を検討し、結果の拡張を行ったことは、新しく、記憶の研究としても、また自己の研究としても意義深い。参加者自身による自己の記憶の分類課題も、方法論上の新しい展開をもたらした。ただし、不十分な点がないわけではない。例えば、主に高齢者を対象とした研究1、2の成果と、青年を対象とした研究3の成果との関係性は、今後より詰めていくべき課題である。また、コーホート（同時代に生まれた集団）と参加者の年代（年齢）との交絡や、記憶の正確性の問題についてもさら

なる検討が必要である。しかし、これらの問題は、本研究を土台とし、研究を続けていくことにより解決可能であると考えられる。3つの研究を通じて、自伝的記憶の分布と想起内容に関する新しくかつ重要な知見を得た点で、本論文の意義は大きいといえるだろう。研究の一部はすでに学会誌に掲載され、一定の評価も得ている。

以上のことを総合的に評価し、本委員会は、本論文の著者槇洋一氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。